
Arinia World **-アリニア ワールド-**

水星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r i n i a W o r l d - アリニア ワールド -

【Nコード】

N 3 1 6 3 L

【作者名】

水星

【あらすじ】

3つの世界の総称、アリニアワールド。アームに人、ローネにラルサ、サールンにエルフが、平和に住んでいた。ある時、道に、魔物が出現し始め、世界に異常が降りかかる。これは、あるきっかけで不思議なチカラに目覚め初めた少年と、エルフの呪われた姉弟と、最高位魔術師、神を冒瀆する少女、孤児で最凶と恐れられる神剣使いの邂逅と活躍の話。

序章 1：父と娘

R u q i a

「とうさんっだめだっ！！ しんじゃだめだ　　っ！」

自分があげた最初で最後の叫び声。

最初で最後の願いは叶うことはなかった……。

~~~~~

わたしの母は、早くに疫病でなくなっている。父は、アイント王国の兵士の武術指南をしながら男手一つでわたしを育てていた。

「父さん。今日は剣の訓練の日？」

「違うぞ、ルキア。今日は槍の日、だ」

「そうだったっけ？」

「そうだぞ？」

「そっか。今日ついてって良い？」

「またか？」

「いいじゃん」

「しょうがない、早く家事を終わらせるよ」

家事を早く終わらせた日、わたしは毎日のように訓練についていた。

わたしの8歳の誕生日、突然、本当に突然父は切り出した。  
「お前は将来何になるつもりだ？ 何をしたいんだ？」

父は周囲の子供達が次々と奉公に出たり、職業訓練学校に行ったりしているのを見て、焦り始めていたのかもしれない。

だけど、わたしはそんなことをするつもりは全くなかった。

「父さん、武術を教えてください」

「……」

「もし、1人になっても武術をやっていたら何とかなるでしょ？」

この頃、アイント王国では犯人不明の殺人事件が沢山起こっていた。

近くに住んでいた父の同僚や、行きつけのお店のところの女の子が殺されたと聞いてわたしはなぜか強くなりたいと思いつけていた。強くなれば、殺されないと思っていた。8歳のわたしにとって、死とは最大の敵であり、恐怖の対象だった。

「なん……だと……」

この言葉を聞いて、わたしは次に叱責の声が飛んでくるのを覚悟した。けれど、父はわたしの想像を100%裏切って言葉を発した。

父は悲しそうなのと、嬉しそうなのが入り混じった表情をしていた。その表情の意味を推し量るには、わたしはまだ幼すぎた。

「本当に、そう思っているのか？」

「……え？ いいの？」

「武術をやる者は、何故か知らないが必ず戦いを呼ぶ」

父が重々しく言った。

「戦いがくれば、お前はいつか死ぬかもしれない。それでも、「それでも、わたしは武術を学んで、強くなりたい」

割り込んで答えた。それほどにまで、強くなりたかった。

「その心、最後まで忘れるな」  
父が言った。

「はいっ！！」

いつもの答え方ではだめだなと思わせる声だった。

わたしはこのときから、父に武術を教わるようになった。



「はっ！……！」

裂帛の気合いと共に槍が突き出されたが、わたしは横向きの体制にずらして受け流した。

そのまま、手に持った槍を横に滑らせ、相手の槍を手首ごと無理矢理横にさせようと試みる。

「くっ!!」

「もらったあつ!!」

相手が呻き声をあげたのを聞いて、わたしはそのまま槍じりで手首を打った。

カラン

軽い音がして、相手の槍が落ちた。

「勝った……」

「ルキアちゃんすげえっ!!」

「ダーシエさんに勝った!!」

「さすがだな」

「ルキアちゃんやばいほど強いじゃん」

みんなの歓声も耳に入らなかった。父さんに勝てた。

父に武術を教えてもらうようになって3年目のわたしの誕生日には、兵隊の誰よりも、そして父自身よりも強くなっていた。

もつどんなことが起こっても、父さんと自分は死なないと思った。ただ、悪夢は起こった。

~~~~~

2年後、武装したら5人の男が、阜朝、家に押し入り、父さんを刺し、撃った。止める暇は無かった。父が刺された時、わたしは寝ていた。

ただならぬ気配を感じて起きたときには、事は終わっていた。

「……なに？ なんなの？ 父さん！ 父さん！ どうしたの？

「答えてよ！！ 父さん！」

「……………」

「答えはなかった。」

沈黙が、唯一の答だった。

父の体から流れ出た赤色が、家の床を汚す中、今から医師師を呼んだら助かるのかな、とそんなことを考えていた。

「こいつもいたのか」

沈黙の中を裂く耳障りな低い声が、わたしの心を苛立たせた。

「なんで！！ なんでこんなことをしたんだよ！！」

「この国を征服する。そのために兵達の武術指南を殺すのは当然じゃないか？」

その端的な答えにわたしは耳を疑った。この国を征服する？ この大国と呼ばれるアイント王国を？

「冥土のみやげに教えてやろう。我々は……………」

父が呻いている。

「我々は、人間じゃないのだよ」

そのとき、喉元にダガーが伸びてくるのをわたしは見た。とつさにロングソードで、ダガーを払い、後ろに下がった。心臓が早鐘を打っている。まわりがよく見えない。どうしよう。殺される……………！！

「さあ、選びたまえ。自ら命を絶つか？ それとも、連続殺人犯である我々に殺されるか？」

「ル……………ア……………に、げろ……………」

父の声が聞こえる。体の奥の方が熱くなる。

右手が、勝手に動いて、ソードが残像を刻んだ。

キーン

耳の奥に聞こえた音は、何の音だったのだろうか。

不意に耳の奥にそんな甲高い音が響き、気づくと、手には血で汚れたロングソードがあった。そして、まわりに5体、切り刻まれ

た死体があった。

後ろで父の呻き声を聞き、わたしは正気に戻った。

「医師を呼ばなきゃ」

医師を呼ぼうとしたけれど急に体の力が抜け、わたしは崩れるように倒れてしまった。

「だめだっ！　とうさんっ！　しんじやだめだっ！」

「まただ！！」

父さんが、刺されるところだ……！！

わたしはベッドから跳ね起きた。

「大丈夫か？」

父が指導している兵の中で、特にわたしと仲がよかった仲間が目の前にいた。

「なにがあったんだ？」

その言葉を聞いて、わたしは叫んだ。

「とうさんは！？」

兵士は顔を背け、言った。

「あなたの親父さん、ダイネシエード・シアルリーフは……亡くなっただよ」

序章 1：父と娘（後書き）

ごめん、父さん
守れなかった

序章 2：名前

A s t y

だれか、だれか

おれの名前を呼んでください

だれか、だれか

おれの名前を教えてください

§§§§§

「入りなさい」

神父さんの声が聞こえて、おれは部屋に入った。

ここは、大聖堂カルナス。ラルサ族の8割が信仰するリメリス教の教会。高位の魔術師達が暮らす、ローネ最大の教会だ。

おれは、売られた。親が、この大聖堂に売ったんだ。高度な魔法のスキルを持っているからと言う理由で。高値で売ることができると言う理由で……。

売られるのは良かった。蹴られても、殴られても、呪うような低い声で罵詈雑言を叫ばれても、自分は愛されないとわかってしまっただから。

おれが持っている、死んだお父さんとお母さんから譲り受けた紫の瞳。お母さんは、お父さんじゃない人と紺色の瞳をした男の子を産んだ。結局、おれより先に、紺色の瞳をした男の子に名前は付けられた。

おれの名前になるはずだった。その子の“ハント”……ナミルハント”という名前は。

今日は、おれの洗礼日。名前を、お母さんから貰えなかった自分

の名前を、もらうんだ。7歳になって100日が過ぎると、名前のない子供は教会に行つて、名前を授かる。

ローネでは、平民以下の身分の者は、ほぼ全ての子供が、そうやって名前を決められていた。でも、おれは、平民でもないのに、その方法を取らなければならなかった。

「今日がどのような日か知っておるかな？ ラース」

神父の人がおれに話しかける。ラースとは、今のおれの位階のことだ。術師見習いのことだ。

「はい、存じ上げております」

「いまから、お前の名前を決めたいと思う」

「お願いします」

神父さんが、小さい炉に香を入れた。

「ラリウシアナーズ・ソynchャールドの御名において……」

長い呪文が、頭の中で渦を巻く。

香を使つて悟りを開くりメリス教は、なにをするにも香と炉が必要だ。だから、いつもは香の匂いなんて何とも思わないのだけれど……。

今日は別だった。頭の中が、周りの風景と同じ様に霧がかかっているみたいにはうつとする。香の匂いで、吐きそうになる。

辺りが、真つ暗になった。

~~~~~

気がつくとき、おれの体はベッドに横たえられていた。

「気がついたかな？」

「あつ、神父様」

立ち上がるうとすると、眩暈がした。

「わっ……」

「無理をするでない」

「神父様、おれはいつたい……？」

「強い魔力を持つ子供の中には名付けの儀式を拒否する者がいるんじゃない。まあ、これだけの拒否反応が出るのなら、スフィア・レントイス　最高位の魔法使いにでもなれるじやろう。とにかく、そういう者は自分で名付けの儀式を行わなければならない」

「自分で、名付けの儀式を行う……？」

訳が分からなかった。いきなりそんなことを言われても……。

親が付ける名前を、自分が付けられるとは思わなかった。

「指輪を見てみなさい」

言われたとおりに、生まれたときに授かったというサファイアの指輪を見た。

「どっじゃ」

澄んだ青色を見つめると、心に、一つの名前が浮かんた。厳密に言つと、頭に、その名前を呼ぶお母さんの声が響いた。

「お前の名前を言ってみなさい」

一呼吸置いて、おれは言った。

「おれは、おれの名前は、アステイ。アーシューティ・シーフィ  
リー」

序章 2 : 名前 (後書き)

お母さん

呼んでください

おれの名前

### 序章 3：大罪

Rorla & Retha

「これより、異端裁判の儀を始める」

頭の中に、現実を突きつけるその声が響く。

私の母は、異端裁判にかけられるのだ。原因は、私達だった。呪われた子が生まれると知りながら私達を生んだせいだった。

「コーナ、前に出ろ」

「母さんっ!」

「行くな。馬鹿」

母を追いかけようとしたレスアが他のエルフに首を蹴られている

……!

「うっ……」

「レスア!!!」

助けに行きたくても、男の人に腕を掴まれているため、助けに行けない。レスアを誰も気にかけていない。

それもこれも、私達が呪われた子、レセーリードだからだ。

~~~~~

レセーリード。もとは古代の異能者だったそうだ。ある時、その異能者が強大なチカラを生み出し、世界が滅びるまでの危機に陥った。チカラの重圧に耐えられなくなったレセーリードが息絶えなければ、世界は滅びたであろうと言われていた。その出来事を繰り返さないようにエルフは厳しい規則をつくった。

レセーリードの全ての記憶を消し、森を追い出す。レセーリードを生んだ者は10年後に死罪。

~~~~~

いつの間にか刑が言い渡されていた。

「コリンサーゼニア・エンシャードに、死罪を申し付ける。異論は無いな」

群衆の首が縦に動くのを私は見た。

涙すら、もう出なかった。

~~~~~

夜は、家にいることを許された。

「何を食べたい？」

問いかけられた私達は、ただ首を振った。食べたいものなんてなかった。1週間程、何も食べていないというのに。これから自分達はどうなるのか。それしか頭になかった。

「つつ……」

レスアが顔を歪めた。裁判のときに、首を蹴られているのだ。かなり痛いに違いない。

「大丈夫？」

母が、優しい声で、そう言った。

「ちよっと待っててね」

言い残すと、母は台所に立った。何かの薬を取っているのだろう。

「姉ちゃん、オレ達は、どうなるんだろう」

「……わからない」

レスアの声に、首を振ることしかできない私が酷く情けなかった。

~~~~~

処刑の日。母は手首を縄で縛られ、立たされていた。私達も縄で縛られ、身動きができない。

「もうすぐ処刑が始まるんだ。おとなしくしておけよ」

そう言つて去つていった男の後ろ姿を、レスアが睨んでいた。多分、私はもつと睨んでいた。

そして、刑の実行時刻になった。

「これより、コリンサーゼニア・エンシャードの処刑を行う」

「これを飲め」

死刑執行人達は、母を毒殺しようとしていた。

母は動かなかつた。

微動だにしなかつた。

黒に近い灰色の瞳で真っ直ぐに宙を見据えていた。

まるで、今から死なされることなど、何も意味がないと言つたかのように。

「……力ずくで飲ませろ」

死刑執行人の後ろに控えていた3人の男達が、母の所に行った。

1人が母を動けないように支え、1人が母の顎を下げ、最後の1人が毒薬を手にした。

「母さんっ！！」

叫びが虚しく響く。

男が、毒薬を入れた椀を手にし、一気に母の口の中に流し込んだ。流れるような行動にはなんの躊躇いもなかつた。

「……っ、げほっ、がっ」

既に色を書さない世界となつた私の視界は、その鈍色に染まつた。

「ああっ……」

母の体が痙攣したあと、動かなくなつた。

「来い」

呆然とする私達に、記憶を消す儀式を始める男　　いや、悪魔の  
声が囁かれた。

序章 3 : 大罪 (後書き)

返して

返せよ

私の

オレの

お母さん

## 1・襲撃

「眠たいな……」

3つの世界を結ぶ洞窟のある町の、人間界に属するアームⅡラルク。そこで、1人の少年が呟いた。

薄い金髪に、これもまた薄い水色の瞳。10代後半のようだが、それにしても少し背が高かった。少年は何もする事がなさそうな様子で、つまり暇だった。

「暇だな……」

もう一度少年が呟いたとき、

「おい、ラチエ！」

彼の友人が家に飛び込んできた。

呼ばれた少年、ラーチエンド・ファアリエンはノックもしないで入ってきた友人に返した。

「何だよ朝っぱらからうるさいな。ノックもなしかよ、ティオ」

ティオと呼ばれた、黒髪に蒼の瞳をした友人は叫んだ。

「呑気なこと言ってる場合か馬鹿野郎！ モンスターの襲撃だ！！」  
「嘘だろ！」

~~~~~

町の中を、ティオとラチエは駆けていた。

「なんでラルクにモンスターが来るんだよ」

「知ってたら苦労しないって」

2人ともが同じ疑問を持っていた。

なぜ、モンスターが来ないと言われているラルクにモンスターが来るんだ？

この3つの世界を繋ぐ地ラルクは、言うなれば聖地だ。元来モンスターの出現自体が珍しいアリニアワールド。それが、聖地に出

現したのだ。

異常を感じた2人の間に沈黙が生まれる。町の子供達の中では12を争う程の剣の腕前を持つが、2人はまだモンスターと対峙したことはなかった。

「多分、怪我人がたくさんでるだろう」

「そうだろうな。町の人達は100%モンスターと戦ったことがないはずだ」

「役に立てるかどうかは知らねーけど、急がなきゃ」
2人は足を早めた。

~~~~~

中心部は悲惨な状況だった。

「間に合わなかったか」

「今はそんなこと言ってる場合じゃない。急ぐぞ」

町を襲ったのはエンフィードバード、オールドゴブリン。それぞれ、エンフィード湿地とオールド山地に生息するモンスターで、同じ系統のモンスターに比べるとかなり手強い部類に属した。

「キエエー……ゲエエー……」 空から奇声をあげて襲ってくるバードをロングソードで振り払い、2人は町の中心部に向かった。

ラルクの住人の中でも武器の扱いに慣れている男達がモンスターの相手をしているが、モンスターの方が圧倒的に有利だった。

「行くぞー!! ラチエー!!」

ティオの呼びかけには応えず、ラチエはモンスターと男達の命がけの舞いの中に身を踊らせた。

ティオの剣が、ラチエの剣がモンスターを切り裂いていく。さっきまで戦っていた男達はバード達が吐く睡眠ガスをもろに吸い込んでしまい、倒れている。当然、その場にいる20匹相当のモンスターの意識はラチエとティオの2人に引きつけられていた。

「……やばいぞ」

「早く……助けを……呼べねーか!？」

「無理に……決まってんだろ!！」

後ろから襲いかかってきたゴブリンを振り向きざまにぶつたぎったラチエは焦りを感じていた。疲れたときが、2人の最後だった。

「やばいつ!！」

「ティオつ!！」

斜め上から攻撃されたティオがバランスを崩している。その上にはゴブリンのグレーブがあった。

「くそつ!！ 間にあわねえつ!！」

距離が遠すぎて助けに行けない。その焦燥感が、今度はラチエの隙を作った。上からバードが10匹、一度に振ってきた。まさに絶体絶命。

目の端に、振り下ろされるグレーブが見えた。

「だめだつ!！」

必死の思いでロングソードを上に掲げ、次の攻撃を防ごうと構えたが、いくら待っても攻撃が来ない。

ラチエは、周りの音が聞こえていないことに気がついた。

次に音が戻ってきたときには、周りはモンスターの死体でいっぱいだった。

そして、ラチエとティオの間に、1人の少女が立っていた。鮮やかな茶色の髪が、白の光に輝いている。

「大丈夫?」

言われてやつと体を動かすことが出来た。

「? ああ」

少女は一つうなずき、レイピアを鞘に収め、倒れているティオのいる方向に向かった。

「ティオ!」

「大丈夫。睡眠ガスを吸い込んでしまっただけ」

そういう少女のレイピアの柄には複雑な模様が描かれていた。

「ん?」ラチエの記憶の中で、何かが動いた。

「そのレイピア……。お前、もしかして」

「気づかれるようだから、先に言っておく。わたしはアイント兵。ラルクに魔物が襲撃するという情報が入って派遣されてきた」

「そうなのか……」

言い切った少女の瞳は、明るい緑色。すっと通った鼻筋、はらりと落ちた茶色の髪に白い肌が際だっていた。

「とりあえず、どこかにあの人達を運ばないと……」

見かけの年齢のわりにかなり大人びた口調で話す少女を、ラチエはただ呆然と見つめていた。

## 1・襲撃（後書き）

3つの世界を繋ぐ地で 失われた人種の少年と 神剣使いが出会った。

## 2・洞窟の印

襲撃から、僅かな時が過ぎた。

「モンスター」の撃退に力を貸してもらい、大変助かった。ありがとう」

「兵士として当然のことをしたまです。礼を言われる覚えはございません」

町で一番大きな建物の中で、ラチエは記憶の中にある限り生まれ、初めて入った長の家に感動していた。横ではさつきモンスターを倒した女兵士が長に礼を言われている。

「今宵はどうぞ我が屋敷でゆっくりとお休みください」

「……では、お言葉に甘えさせていただきます」

~~~~~

長の家に泊まることになったアイント兵とラチエは町の入り口に向かっていった。

長が半強制的にラチエをアイント兵の案内役に抜擢したのだ。ラチエは嫌だと言ったがまんざらでもなさそうだった。

「助けてもらったのに名前も言っていないな。俺はラーチエンド・フアーリエン。生まれも育ちもここ。お前は？」

「ルキア。ルケイアーク・シアルリーフ。アイント王国出身。えつと……」

「ラチエでいいよ」

「ラチエ、今どこに向かっている？」

「とりあえず、洞窟」

「洞窟？」

「ああ。というか、知らないのか？」

「何を？」

「ここは”ラルク”。」3つの世界が交わる地”だぜ」

人間、ラルサ、エルフ。それぞれが住んでいる3つの世界は、あの洞窟で行き来できるようになっている。その洞窟がある町、ラチエの言う”3つの世界が交わる地”がラルクなのだ。

「それなら聞いたことがある」

「この街にはそれぐらいしかないからな」

「そう」

「退屈するだろうけどゆっくりしてけよな」

ラチエの言葉に返事を返さずに、ルキアはただ歩き続けた。

かなり無口らしい。

「(……気まず)」

~~~~~

「ここだ」

ラチエが案内した洞窟は全体が薄青く光っていた。2人は言葉を交わさず、黙々と歩いていく。

と、ラチエが立ち止まった。

「ここが人の足で行ける一番限界だな。これ以上行きたければ王都にあるでっかい機械を持ってきてからじゃないと確信的に無理だ」

「そう」

ルキアが黙って辺りを見渡す。幼い頃から何回も親に黙ってこの洞窟に来ているラチエには内部の構造は頭の中にすべて入っているはずだった。だが、

「あの石の模様なんだ？」

石の方に意識を向けたルキアの目に、右の上に浮かぶ濃い青に光る三角形、それを囲む5つの記号がうつった。

「消えてく……？」

だが中央の三角形と菱形を残し、あとはゆっくりと消えていってしまった。

「なんだよー」

「ぼやくラチエを放って、ルキアは1人考え込んでいる。」

「菱形……？　ラルクの洞窟……？」

「ラチエの薄水色の、アクアマリンのような瞳が太陽の加減で光った。」

「あつ……」

「どうしたんだ？」

「いきなり顔を上げたルキアに、ラチエが首を捻った。」

「そこに立って」

「は？　何でだよ」

「良いから」

「珍しく　と言ってもルキアとラチエはまだ会ったばかりなのだ」

「が　ルキアが大きな声を出す。」

「ま、いつか」

「ルキアはラチエをその石の場所に立たせた。」

「ちょうど岩の隙間から光がさしこむ位置だった。眩しさに一瞬ラチエが瞳を細める。」

「今日は、湖水月の3日。だから……」

「なにか呟くと、少し躊躇う素振りを見せたが、ルキアはラチエの薄い水色の瞳を覗き込んだ。」

「……やっぱり」

「な、なんだよ」

「まじまじと覗き込まれてラチエの声が上擦った。」

「見て」

「今度はルキアとラチエの位置を入れ替えて、ラチエがルキアの綺麗なエメラルドグリーンの瞳を覗き込んだ。」

「えっ……！！」

「ルキアの右の瞳には、菱形の印が浮かんでいた。」



ルキアが岩にもたれ、ラチェが岩の上で片膝を抱えていた。

「どういうことだ？ ルキア」

「……」

虚空に投げた言葉は、返ってこずに、岩が呑み込んだ。

「昔、聞いたことがあったから」

「誰から……？」

「わからない」

「は？」

「名前は聞いてないから。城に来た、わたしより少し年上くらいの女の子。魔術師だった」

「そんなに早く魔術師になるのか……」

「感心するのはそこか？ とでも言うような目をルキアはラチェに向けた。

「魔術師、というよりも聖職者、と言う方があっているかもしれない。その子が、”アーム＝ラルクに行くなら、これをしなさい”と」

「へえ」

「1番はじめに言葉を交わした男の子と試せとってた」

「そうなのか」

「黒い髪、灰色の瞳をした女の子だった」

「灰色の瞳なら、エルフか……」

「うん。聖職者なら、エルフの筈」

「そうか」

「……」

「それで？ 何なんだ？ あの印が目には浮かんだら、何だって言うんだよ？」

「正論。というか、ルキアが一番に答えるべきだった物はこのことについてだろう。」

「その女の子が言うには、世界に異変が起こったとき、救世主になるらしい」

「はあ？ なんで俺？ 人違いだろ」

ラチエの反応は一般人なら当然のモノだった。

2人の間に沈黙が流れた。お互いでお互いの言葉の意味を考えていた時間は、轟音によってかき消された。

ダガーーーーーン!!!!!!!!!!

「わっ！ 聖なる洞窟にモンスター！」

「洞窟が崩壊したらまずい。はやく倒さないと！」

遺憾なくその暴れっぷりを披露した”それ”は洞窟の壁を半ば砕きながら表れた。

「そうらっ！！」

「!!!!!!」

2人が一斉にモンスターに切りかかった。

キーーーーン

「はやっ!!!!!!!!!!」

「っ!!!!!!」

高い音がして、2人の剣がこぼれた。

思案しているルキアに、さっきの轟音が嘘のような静さで、モンスター<sup>の</sup>尾が迫っていた。

「ルキア！」

「!?!」

鈍い音がして、ルキアが吹っ飛ばされた。

「ルキア！ 大丈夫か!!!」

返事はなかった。

「やべえな」

ラチエの額に一筋、冷や汗が流れた。

「」

モンスターが、緩慢な動きでラチエの方を向く。

「くそっ……!!」

ラチェが顔の前で折れたロングソードを構えたときだった。

「アイセーゼ!」

「あ?」

呪文の始動語が聞こえ、モンスターが動きを止めた。氷に覆われ、固まって。

「だ、誰だ?」

「それはあと! 今は早くこのモンスターを倒す!!」  
鋭い声だった。

「その石に……」

声が、止まった。

「なんだよ。はやく!! モンスターが襲ってくるだろう?」  
事態の危険さに押され、ラチェが叫んだ。

「キミは自分の苦痛に変えてもその子を助ける気か?」

「わけわかんねーよ! はやく!!」

「……キミの印に手を当てるんだ!! 印は三角形、トライアング  
ル!」

「わかった!!」

ラチェは薄青く光る石に手を当てた。

「あっ……」

すると、消えていた星の印が再び浮かび上がった。

「どうするんだ!」

「キミの手に光が移ったら、モンスターにそれを向ける!!」

ラチェは自ら光を出している手をモンスターに向けた。

c c c e e e e e

辺りにかん高い音が響きわたり、フラッシュを焚いたような光りがはじけ、次の瞬間、その空間に立っている者はいなかった。

## 2・洞窟の印（後書き）

トライアングルの紺碧は、  
溶けるように消え去った

### 3・古文書に登場する6人

「長さん。この人は、あの伝説の古文書に出てくるレーテットの人ですね？」

少年の訪ね方は、確信を持った疑問形だった。

「やはり、そうでしたか」

溜め息と一緒に、長はその言葉を吐き出した。

アームⅡラルクの長の家。

そこで、薄茶色の髪と紫の瞳を持った少年と長が話をしていた。

傍の2つのベッドには、ラチエとルキアが寝ていて、さっきまで2人の治療を手伝っていたティオも、うたた寝をしていた。ティオの状態からもわかると思うが、時間はかなり遅かった。

「お主はあの古文書を読んだことがあるのか？」

「はい。あまり言いたくありませんが、おれは、スフィア・レンティスですから」

少年の言葉の中にあつた、スフィア・レンティスと言う単語に、長は反応した。

「スフィア・レンティス……！！ お主はその年で大聖堂カルナスの最高位魔術師に？」

「ま、まあ……そういうことになります、ね」

少年の顔から冷たい印象を受ける表情が取り払われて、苦笑いが浮かんだ。

「お主は今何歳だ？ 子供の形をした年寄りではないのか？」

「本当、あまり言いたくないんですけど……15歳です」

「15歳っ！？」

長の顔は驚愕の色で染まるが、反対に少年の顔は笑いを堪えているようだった。いや、思いつ切り堪えていた。

「スフィア・レンティスなど、15歳でなれるものではないだろう……。それだけお主の魔力が強いのか……」

「……っつっ」

と、会話を遮るように呻き声が聞こえた。

「目を覚ましたのかな？」

少年が後ろを向くと、薄い金髪を持った頭が起きていた。

「どう？」

「すつげえ体が痛い」

少年の間になにも思わず応えていたラチエだったが、何か思うところがあったらしい。考えた後に叫んだ。

「あーっ！！！！！！！！！！」

「うわっ！　なんだよ？」

「モンスターはどうなったんだ！？」

「キミの一撃で灰と化したよ」

「ならいいや。お前はさっきの氷魔法の……？」

「うん。おれの名前は、アーシューティー・シーフィリー。アステイって呼んで」

「オツケー。アステイだな。俺はラチエ。ラーチエンド・ファアリーエン。ここで寝てるのがルキア、ルケイアーク・シアルリーフ。アイントの剣兵。んでこいつがティオ。ティリゼイオ・サクファーン。俺の幼なじみで剣超上手い奴」

ラチエが、寝ている2人の略称と本名を、ざっと紹介した。

「ふーん。ラチエにルキアにティオか」

「ずばつと質問から言っつて良いか？」

「おれが答えられるモノなら」

「なら聞く。さっきの印はなんだ？　正直俺はモンスターに手を向けてあたりが光ったところまでしか覚えてない」

「……今から言う話。全部信じるか？」

アステイの紫の瞳が、ラチエをひたと見つめた。

「ああ。信じる。信じるから、わたし達にも聞かせて」

台詞を奪い取られ、ラチエが隣のベッドを見た。

「ルキア……起きてたのか」

「うん。……アステイ、わたしはその話、臆気にしか知らない」  
「オレも部外者っぽいけど知りたい」  
緑、蒼、薄い水色。6つの瞳に見つめられてアステイが頷く。  
「わかった」  
そして、話し出した。

~~~~~

「キミ達は、大聖堂カルナスと言う建物を知っている？ ラルサ族の族教、リメリス教の総本山みたいところだ。おれは小さい頃、そこに売られて強い魔力を持っていることを知り、訓練を受けて高位の魔術師になった。」

カルナスには、1巻の古文書があるんだ。他の場所にもあるらしいけど。おれは高位の魔術師に仲間入りしたとき、それを読む許可を得て、読んだ。

そこには、いずれこのアリニア・ワールドを襲うであろう異変、それを救う人物、原因となる4つ目の世界のことが書かれていた。まず異変。これはもうキミ達もわかっていると思う。アリニアに出始めたモンスターだ。カルナスの魔術師達の調査によると、出現場所はアームでもなく、ローネでもなく、サールンでもない。アリニアの何処でもない。4つ目の世界、カミル。それが何処にあるのか、どんなところなのか、誰も知らない。

次に、救う人物。この展開だとわかるだろう？ ラチエとルキア、そしておれ。それにラルサの1人とエルフの姉弟」

「根拠は？」

話し続けていたアステイを、ラチエが遮った。

「ラチエの場合は、その瞳と髪」

「俺の？」

「その薄水色の瞳に薄金髪　太古に滅びたとされるレーテットと呼ばれる種族の特徴。現代で生き残っているのは、」

アステイは、一度言葉を切った。

「キミだけだ」

「えーっ！？ 本当に人違いだろ!？」

「決定的な証拠は、あの洞窟でのこと」

「ああ？」

「あの光…… モンスターを一撃で倒せるけれども、6人で使わなければ、後に本人に苦痛を与える能力。あれは古文書に書いてあったとおりだ」

「嘘だろ……」

「諦めな」

どこまでいつても認めたくないラチエの肩を、テイオがぽんと叩いた。

「ルキアは？ 根拠がある？」

「別に。気になったときに聞くからいい」

アステイは頷き、また話し始めた。

「最後に4つ目の世界カミル。さっきもいったけど、この世界についてはまだ研究段階だ。だからおれ達がまずすることは、あとの3人と会うこと」

「どうやってその人物だと特定する？」

「あの洞窟の石板を持って行く。あれに、新しい印が現れたら、その人物だ」

「俺はトライアングルなんだな？」

「そう。おれはスクエア。ルキアはダイヤ」

「残りはサークルとスターとダブルサークルか……」

「そういうこと。おれからの話はこれで終了。何か質問は？」

3人は何も言わなかった。

ルキアは進んで質問するほど口数が多い方ではなかったし、ラチエは、さっきの質問で全てを悟ったようだったし、テイオに至っては、自分には関係ないとどこ吹く風だった。

「ということ、明日出るから」

「早っ!？」

ラチエは驚いていたが、ルキアは特に無反応だった。

「えっ!？ 驚いてんの俺だけ？」

「うん。わたしは今すぐにも出発できる。どれだけ長い旅になっても耐えられるような荷造りは此処にくる前にして、其処にある」

「まじ!？ 一回アイントに戻らなくて良いのかよ？」

「いい」

「アステイは？ ローネに戻らないのか？」

「うん」

「決まりだな。ラチエは家がここにあるんだし、親いねえだろ？」

「さっさと準備しろよ」

「……えー？」

あくまでも、本当にあくまでも認めたくない薄金髪の少年がいた。

「えー？ じゃねえっ!! せつかくレーテットなんだし世界の危機なんだし行かないっていう選択肢は無いからな!!」

部外者である黒髪の少年が叫んだ。

3 ・古文書に登場する6人（後書き）

「てなことでおれはもう出てこねーんじやねーかな？」
蒼瞳の少年が呟いた。

4・出立と不安

空の色が、凍青と薄青のグラデーションに照らされる。

アームⅡラルクの出口。ラチエとルキアとアステイ、テイオ、長が立っていた。ラルクに留まるテイオ、長は手ぶらだったが、他の3人はそれぞれ旅へ出る為に厳選した荷物を持っていた。

「準備はできたのか？」 ラチエ
大分軽い雰囲気です、テイオが聞く。

「お陰様で。と言うかそのせいで昨日全く寝られなかった……」
質問に嫌味と本音を返し、欠伸を1つする。

これから重要な旅をするというのに、これでは少し不安である。

「しつかりしろよ!!」
アステイが命令口調で言った。

「命令するな!! 明らか俺の方が年上だろ？」

「敬語の方がよろしいのでしょうか？」

「あ、いや……別に、良い……」

いきなり敬語にモードを変えたアステイにラチエがどもる。

「おいコラどつちだよ」

「年上にキレんな!!」

「年上とか関係ねーだろ!! おれの年齢知らないクセに!!」

「じゃあ何歳なんだよ？」

「15歳……」

「ふんつ！俺は17歳だぞ？」

「だからなんなんだよこのあほ!!!!」

「敬え!!」

「嫌だ!!」

「おまえらうるさい!!」

漫才に発展しそうな2人にテイオがキレる。

「そろそろ行く？」

ルキアに訪ねられて、男2人組がまごまごする。というか赤面する。男と言うのは常に女の子の前で格好付けていたい存在なのだ。ましてや言い争うところを見られるなど論外である。

「危険な旅になるじゃろうが、気をつけるのじゃぞ」

「はい」

「わかりました」

「わかった」

ルキア、アステイ、ラチエが揃って返す。

「じゃ、いつてらっしゃい」

テイオが言い、長が頷く。それを見たルキアが敬礼、アステイが両手を胸の前で重ねるリメリス教の挨拶、ラチエが剣を顔の前で捧げ持つことをした。

そして3人は無言で踵を返す。

世界を救うために、破滅か、平和かの分かれ道へ。

~~~~~

「なあ」

「なんだ？」

「ラチエの名前の由来って何なんだよ」

「なんか唐突だな」

アームⅡラルクを出て、平原を歩く3人の子供。静寂と、時折風がたてる草撫で音に包まれてひたすら西を目指す。無言で歩くのもなんだからと、話すネタを考えまくっていたアステイ。ようやくネタを見つけ、話し掛ける難易度の低いラチエに問うたのだった。

「俺の名前はさ、古い言葉で、まあ多分レーテットの言葉なん

だろうけど、透き通った水色っつー意味があるらしい」

「キミの瞳の色か」

「ああ。俺としてはエルフの黒とかかっこいいと思うんだけど……」

「それはおれもわかる。けど結構おれ自分の髪色とか瞳の色とか気

に入ってるし」

「お前はナルシストか！？ 確かに綺麗だけど。でもさ……」

「うん」

頷きあい、同時に言う。

「ルキアの瞳の色綺麗……！！」

「っ！ かぶつちやけルキア美人……！！」

「同感……！！ ぶつちやけたなお前……！！ でも、ハードル高いよな……」

……

「はああ……。これから増える予定の仲間にも男いる？」

「おれが思うに多分エルフ」

「いんのかよ……！！！！」

ラチエの心からの全力叫び。但しルキアに聞こえない程度に抑えてはある。

「俺さ、彼女できたことないの。いつも片思いどまりなの……！！」

「うるさいよ。わかったから。ていうか重要な旅なんだからこんな話やめようよ……！！」

自分から話を振ったクセにぶち切りにするアステイ。

「アステイ」

「？ あ、ああ。なんだ？」

切った途端、ルキアから話し掛けられる。

「まずどこへ行く？」

「そうだ。残ってるメンバーがラルサとエルフならアーム＝ラルクからローネヤサルンに抜けた方が良かったんじゃないのか？」

2人の問いに、アステイが答える。

「アイント王国に行く」

「は？」

「なんで？」

当然とも言える2人の疑問符。特に動じずにアステイが返す。

「大国からの支援・理解はやっぱりあった方が良く。そして」

「「そして？」」

「あそこでは話さなかったけど、そのエルフの姉弟の姉の方が何年前かにアイント城を訪ねているんだ。その情報収集も兼ねて」

「なる」

「理解した」

「ルキアには何度も行き来させて悪いけれど」

「構わない。それに、わたしは剣兵大隊長だから、来客用宿舎を使う許可を出せる。少し古い建物だけれどそこを使えば宿代が浮く」

「じゃあお言葉に甘えて……ってルキア大隊長なのか!？」

ラチエが驚く。ルキアが渋い顔をしながら頷いた。

「大隊長って何だよ？」

アーム アイントの事には疎いアステイが尋ねる。

「アイント王国の……兵の位だ……。数万人もの兵達を統べる、一番のトップがアイント王国兵隊長。二番目が、大隊長。ルキアは剣が得意だから、剣隊の実質的なトップになったんだ」

「すげ……」

ようやくそのすごさがわかったのか、アステイの紫色の瞳が見開かれる。

「ルキアってすごいのかな」

「なあ!! そごいよな!! だってまだ俺達と変わらないぐらいの年なのに、俺達より年上のおっちゃん達より強いんだぜ? どんだけすげーんだよ!!」

クールな反応のアステイに対し、騒ぎまくるラチエ。

「あんまり騒いでやんなよ。ルキアだって困るだろ?」

「あ、ああ、そうだな」

気遣いのあるアステイの言葉に、ラチエが自重し始める。

「ラチエ、アステイ」

透き通るような、ルキアの声が2人の名を呼ぶ。

「「なんだ?」」

「アーム、ラルクとアイントの間にはあの町 シュアルしかない」

ルキアの指す方向に、建物の群が見えた。

「今日中にアイントまで行くのは無理だから、シユアルで泊まった  
ら良いと思う」

「なるほど」

「なーる」

「それだけ」

言い終わると、発言してから今まで器用に後ろ向きで歩いていたの  
を方向転換してルキアは歩速を早め始めた。

モンスターが頻繁に出没する今、3人、特にラチエの装備が  
万全ではないのに日がかげり始めてから町に着くのでは遅い。夜目  
が聞くルキア以外は、手が出せないであろう。戦うための鍛錬なん  
て、2人は体験したことすらないだろうから。

それに、とルキアはちらりと後方からついてくる独特の色味の紫  
瞳をした少年を見た。

彼、アステイの使うリメリス教と連動する魔法は、室外で使  
うとき、「符」を使用する。恐らく考え得る限界の早さでラルクに  
到着したであろうアステイは、ほぼ確実に「符」の補給を行ってい  
ないはずだ。もし戦闘になった場合、「符」がないと絶対に此方側  
が不利になる。

「急がないと……」

知らない間に、ルキアは呟いていた。

どこからモンスターが現れても、対応できるように頭の中で考え  
ながら。

#### 4・出立と不安（後書き）

心に巣くう不安を抑えることなんか  
ガキだった頃の剣の稽古より  
簡単だ

## 5・通過点シュアル

「らっしやい!!! お!!! 見ない顔だね。 旅の人かい？」  
「はい……」

シュアルの宿屋兼食事所。威勢のいい女性に出迎えられ、ラチエが戸惑いながら答えた。

長く茶色い髪をした女主人はカウンター席を指して、  
「そこに座って」

と言った。そして手際よく程よいぬるさのお茶をカウンターに並べる。

「まずはお飲み。注文とかはそれから聞くよ」

気前の良い台詞と共にコップを3人に向け押し出す。

「」「ありがとうございます」「」

口々に同じ言葉を言った3人は、コップの中身を1口飲んで軽く歓声を上げる。

「おいしいです」

「すっごい爽やか!!」

「なにを使っているんですか？」

女主人の片眉が上がった。

「おや、そう言ってくれると嬉しいね。それは、ハヤラって言う柑橘系の果物のお茶だよ。疲れをとる効能があるんだ」

「へえ、そうなんだ!! お姉さんは薬草師もしているんですか？」

「アステイの”お姉さん”との言葉に、女主人は苦笑した。

「お姉さんじゃなくて私の名前は、ヤリタヴォーラ・クレイナーズト。リタって呼んでくれ。ちなみに私は薬草師ではないよ。ここに来る旅人達の知識を貰ったんだ」

「そうなんですか」

女主人とアステイの会話が一段落つく。すると今度は3人を、客達を取り囲んだ。

「どこから来たの？」

「3人とも、綺麗な髪と瞳の色してるなあ」

「どこの人種だい？」

「その女の子、もしかしてアイントの兵かい？」

「俺、アイント兵だったよ！！」

「その前になんて名前なのー？」

「子供だけ？」

「偉いな」

「どこに向かうんだ？」

投げられる沢山の疑問符。素直に答えて良いものかと逡巡するルキア達。それにリタが声をかける。

「大丈夫だよ。今ここにいる人は町人ばっかだ。みだりに噂を流すような人じゃない。まあ答えなくなったら答えなくて良いよ」

リタの言葉にルキアが立った。

「わたし達は、聖地アームⅡラルクから来ました。金髪の彼は、ラーチエンド・ファリーエン。左側の彼はアーシューティー・シーフイリー。そしてわたしがルケイアーク・シアルリーフ。ラチエ、アステイ、ルキアが呼び名となります」

アリニアワールドでは、殆どの者の名が長く、短縮・呼びやすく変えた呼び名というものが存在した。

「わたしとラチエは人ですがアステイはラルサ族です。3人とも幼なじみです。わたしはアイント兵なので、アイントに薬草などを買いに行く2人の護衛をしています」

世界の危機のことは伏せてルキアが上手く説明した。

「そうなんだ」

「まだ子供なのに、護衛ねえ」

「ルケイアークつつつたら神剣使いだろ？」

「すげえ奴なんだな」

「モンスターが出るのに買い出しなんて危ないことよくするわ」  
また口々に町人達が感想を吐く。

「はいはい。もうみんないいだろう？ さて、今日はどうするんだい？」

町人達を追い払ったリタは、真ん中に座っているルキアの方を向いて言った。

「3人5泊でお願いします」

「ご飯・部屋・風呂何を先にするかい？」

「じゃあ、取り敢えず荷物を置かせてください。その後に食事をお願いします」

旅慣れているルキアがどんどん話を進めていく。

「はいよ！！」

返すとリタは奥のキッチンの方に、叫んだ。

「3名様5泊！！ 部屋に案内して！！」

「了解ー！！」

若い男の声がして、カウンターの横から返事をしたと思われる人物が現れた。金色混じりの茶髪をしていた。

「おっ！ 初めての人だね？ はじめまして。僕はカインセーズ・クレイナースト。カイって呼んで。リタは僕の妻。2人でここの宿屋を営業しているんだ」

「そうなんですか」

「ああもう、ごちゃごちゃ言っていないで早く案内しな！！」

「はいはい」

既にかかあ天下になりつつあるクレイナースト家の様相を3人は目の当たりにする。

ガタガタと音をたてて荷物を持ち始めた3人。顔を上げると、リタとカイが揃って言う。

「「通過点シユアル」そして宿屋兼食事所「シユアルウーラ」にようこそ！！！！」

言い終わるとカイは振り返り、言い投げた。

「キッチン頼むね」

「はいよ」

そして3人はカイに案内され、2階の部屋に来た。

「置いたらまた下に来てね。夕飯を出すから」  
言いおいて、部屋を出る。

見回すと、シンプルなつくりだが居心地は良さそうである。狭いことは狭いが。

「ルキア」

ラチエが呼ぶ。

「なに？」

「なんで5泊なんだ？ 早く行かなきゃならないなら1泊でも良かったんじゃないのか？」

アステイがその通りとばかりにこくつと頷いた。

「……武器はアイントで手に入れた方が絶対良い物がある。けれど、薬や符は最低限買っておきたい。それに町の人から後の3人についてとモンスターやカミルについての噂を聞き出したい。1日やそこからへんじや多分話してくれないと思う」

珍しく長台詞を言ったルキアが、俯く。勝手に決めてしまったことを気にしているのだろうか。

「わかった。いろいろ考えてくれてすごく助かるよ。ありがとう」  
ラチエが礼を言う。アステイが、割り込んだ。

「ごめん！！ ちよつとお腹が限界！！ 飯食べさせて」

「空気読めえっ！！」

問答無用とばかりにラチエがアステイの頭をはたいた。

「おい！！ なにすんだよ！！」

「お前が空気読まねえから悪いんだ。てか今思ったんだけどさ……」

「なんだよ？」

「お前結構チビ？ 叩いたとき頭の高さ低かったぜ？」

「黙ればかつ！！」

お返しとばかりに脛を思いつきり蹴飛ばす。

「いだあっ！！ つーかやつぱ凶星かつ！！！！！！！！」

「うっさい！！！！」

「こんなやりとりを階段を降りながらしている2人を見て、ルキアが、」

「これから大丈夫かなこの2人……」  
と呟く。

先程の食堂に着くとリタが声をかけてきた。

「ごめん！！ 適当に空いてるとこ探して座って！ すぐ行く！」  
見ると、リタもカイも手が放せないようだ。

「すぐじゃなくて大丈夫ですよ！」

「ありがとう！！」

断りを入れて席に座る。ラチエとアステイも言い合いながらではあるが席に着いた。

ラチエはアーム・ラルクから出たことが無く、アステイもカルナスから旅したのはほんの僅かの距離である。大聖堂カルナスの堂下町の中にローネ・ラルクがあり、移動するのは大半が異世界間だからだ。

「あれ、壁に貼ってある中から注文を決めて」  
「わかった」

注文方法がわからずにきよるきよるしている2人に教える。

ルキアはちらつと貼り紙を見、いつも食べる物があるかどうか確認した。まあ、無ければそこは食事所ではないといわれるほどポピュラーなメニューなのだが。

「どうしようかな……」

「アステイって意外と優柔不断なのな」

貼り紙の群を見て迷いまくるアステイ。ラチエは少し考えていたが、もう決めているようだ。

たっぷり3分は迷い、急に宣言する。

「……よし！！ あれにしよう！！」

「決まった？」

「あ、うん」

「俺は決まってるよ」

「じゃあ すみません!!」  
声量を上げてルキアが呼ぶ。

「あ、はい!!」  
ばたばたと駆けてきたのはカイだった。

「注文決まった?」

「はい。シユーン(卵や魚を焼き、雑穀を練って焼いた物で挟んだ料理)を1つと」

「俺はカロリー煮(カロリーという厚くおいしい肉をクリームソースで煮込んだ料理)」

「おれはリュサ(木の実や雑穀の入った粥)をお願いします」

「じゃあシユーン」「えーっ!! あんだけ迷ってたのに? つーかり  
ユサじゃ足りないだろ!?!」

カイの言葉を遮ってラチエが驚く。

「……リメリスの神に仕える者は粗食が基本なんだよ」

「栄養失調でぶっ倒れでもされたらこっちが困るんだ!! きちんと  
と食え」

魔術師であることの規律を語るアステイにラチエがキレた。

「んじゃ、こいつは俺とおんなじやつで」

「わかった。じゃあシユーンが1つとカロリー煮が2つだね。すぐ  
作るから待ってて」

「お願いします」

揃って言ったルキアとラチエ。振り返ると慥然とした顔のアステ  
イがいた。

「なんで勝手にした」

「お堅いなあ、アステイは。いいじゃん食は人間の楽しみの1つだ  
よ」

「そういう問題じゃな」「もーいーじゃん過ぎたことだし。細かいな  
アステイ」

「……」

台詞を強奪され、言い返すことも出来ずにアステイは黙り込んだ。

「よりによつてカロリーン煮なんて……」

「え？ 食えないの？」

「食べられるよ。なんでもない」

「ふーん。じゃあいいや」

アステイの吐き出した眩きを流してラチエはルキアと話し始めた。

「ああもつ……勝手過ぎだよ」

## 5・通過点シユアル（後書き）

カルナスに行く前。

お母さんがおれの大好物のカローン煮を作ったときがおれの1番幸せなときだった。

だから

思い出したら どうしてくれるんだよ。

アステイが口だけで空気に愚痴った。

## 6・親密度を高めるための会話

「でさ、ちよつと自己紹介してみたいなことしてみない？」

「はああ？」

突然のラチエの提案に、アステイは呆れ声で、ルキアは無言の疑問顔で応えた。

「いやさ、やっぱこんな旅じゃあいつ命がけの戦闘になるかわからないだろ？　そういうとき、あんまり信用できない奴と味方同士で戦えない。信用するには相手のことを知つとかなきゃいけない。だからまずは自己紹介しよう！！」

どちらかという強引に継ぎ張られた理論に、

「いいけど……？」

「おれ喋りたくないことは喋らないから」

仏頂面でアステイが返す。

「よし。んじゃ俺から。まー本名とかは知ってると思うから。んー何言や良いかな……」。

えつと……俺は、ラルク生まれラルク育ち。旅に出るのはこれがはじめて。

親父は流行病に、母ちゃんは崖から落ちて殺られた。姉貴は水上街マーシエにいる」

「ごめん水上街マーシエってなんだ？　どこかの場所？」

遮ってアステイが聞く。

「アイント王国からひたすら南へ行くと、アイント地方からオールド山地へ出る。そこからさらに南へ行くとウルゼン湖と呼ばれる湖がある。ウルゼン湖に浮かぶ自然島。アリニア　ワールドで1番物と者が集まる街　マーリシエーア。そこが、水上街マーシエと呼ばれるところ」

ルキアによる説明が終わるとアステイの瞳が興味深げに開かれた。「そんなところがあるんだね。説明ありがとう」

「どういたしまして」

「んで、クアント（貸し家屋）の1家借りて住んでた。テイオと子供に剣術教えて金稼いでね」

「ちよつと待って。アステイはレーテット種の生き残りはラチエ1人だと言った。ラチエのお姉さんはレーテットではない？」

ルキアの問いに、やはり軽いノリを変えずに返す。

「姉貴つつたけど、俺の親父は普通にアーミル族（種族名。アームでは殆どの人がこの種である）だったから姉貴の髪や瞳は俺とは違う」

「あ……えつと……ごめん」

「いいんだよ、別に。ただ、なんでもかんでも隠しとくのは苦手なんだ」

「そう」

「剣術の流派はなし。1度長期滞在してたアイントの大級（アイント王国立国軍の階級の1つで2番目の位）さんから実践用に教えてくれた奴を独学でやってきたから」

「わたしの国の大級が？」

「ああ。ルキアは特級（アイント王国立国軍の位の1つ。最上位兵）なんだろう？ 大隊長なんだから」

「うん。でも剣術指南 いや、わたしの父は大兵（アイント王国立国軍の階級の1つで下から5番目）以下を教えていたからわたしとラチエの流派は多分違う」

「……？」

さっぱりわからないアステイが疑問符を浮かべる。気付かずに2人は会話を続けた。

「ルキアの父ちゃんってアイントの剣兵の剣術指南なのか？」

「まあ……そう」

「ふーん。あ、俺からはこんくらい。気になったら何でも聞いて」  
「わかった」

「了解。ってことで次おれ行くよ」

順番のバトンを受けたのはアステイだった。

「うん」

「どうぞ」

「おれはローネのレズラ地方のターユスってところで生まれた。多分3歳のときに、大聖堂カルナスに売られた。名前は貰ってなかったから7歳で名付けの儀式を受けたんだけどなんでか体が拒否っちゃって結局自分で付けた。」

神父さんによると名付けの儀式を拒否する肉体は強力な魔力を持つてるんだってさ。それで訓練を受けておれは最高位の魔術師

スフィア・レンティスになった」

「1つ聞いて良いか？」

「なんだ？ ラチエ」

「お前ってリメリス教の最高位布教者じゃないのか？ カルナスって魔法訓練所なのか？ リメリス教って魔術の1つか？」

繰り返される疑問符。アステイは1つ1つに頷き答えた。

「リメリス教というのは、ややこしいんだけど宗教と一体型になった魔術の方法。カルナスをはじめとする全ての聖堂は宗教を教えたりにするのとともに、キミの言う魔法訓練所のような働きもしている。おれみたいな最高位の魔術師とは別に最高位の布教者ももちろるんいる」

「なぐる。説明サンキュー」

「じゃあ続き。だから、おれの戦う専門は魔法。もう1人くるラルサの奴とは魔法の発動の仕方がちよつと違う。」

兄弟はいない。というか売られたから育ててくれたカルナスの乳母さんがただ1人の家族かな。カルナスには売られる子供が多いから乳母さんが何人かいるんだ。

ふつ。こんなもんかな？」

話疲れたのかアステイが出されていた水を飲む。

「最後はわたしか」

小さく言ってルキアが居住まいを正す。

「わたしはアイント王国の城下町で生まれた。母は、病気で亡くなってる。父も殺された。直接的な肉親はいない。」

アイント王国立国軍の剣術指南だった父から剣術を教わっていた。最終的には父よりも強くなっていた。シアルリーフ家に代々伝わるシアルリーフ流の剣術で。

父が殺されてから、兵に志願してアイント王国立国軍の剣兵になった。両親は兵になってほしくなかったのかもしれないけれど、わたしの能力を活かすにはこの職業しかなかった。入ったら、たくさんの人達と昇格勝負をさせられて特級になった」

淡々と、ルキアが語っていく。

「ごめん特級ってなに？」

「アイント王国立国軍の階級。国軍兵は剣兵、槍兵、斧兵、弓兵、鞭兵、弓兵、盾兵でそれぞれわかれている。それらが下から副兵、准兵、少兵、中兵、大兵、副員、准員、少員、中員、大員、准級、少級、中級、大級、特級となっている。」

そして、特級の中から小隊を取り締まる副小隊長、小隊長。中隊を取り締まる副中隊長、中隊長。大隊を取り締まる副大隊長、大隊長。そして各武器に分かれている兵を統べる王立国軍兵隊長が選ばれている」

わかり易く丁寧な説明が終わる。

「へえー、ありがとう。やっぱりルキアは凄いな」

「そんなことはない」

照れてそっぽを向くルキア。今まであまり感情を表に出さなかった彼女が浮かべた感情らしい感情にラチエとアステイが「おおー」と心内でハモる。

「そうか。ルキアあのシアルリーフ家の人なのか」

「”あの”って？」

「シアルリーフ家は、アームで1番の剣豪家。シアルリーフ流の剣術道場がいくつもある」

「ルキアすごすぎだろ!？」

小声で交わされる会話は食堂内の喧騒にかき消されている。アステイがさらなる賞賛の目で見ているのに気付かずにルキアは続ける。「今は普通に城に併設されている兵舎で住んでいる。……話すことはこれくらい」

言い終えると、テーブルの上に束の間の沈黙が走り抜ける。

アステイが皮肉げに言った。

「で？」

「”で？”って……」

「なんか効果あった？」

「あつたんじゃね？」

「なら良いや」

「えっ……？」

「結果を伴わないことはやりたくない主義なんだよ」

「あつそ……」

「はいお待たせー」

呆れた様子のラチエの前にカロリーン煮が置かれた。

「カロリーン煮2つとシューンです……」

「……ありがとうございます……」

待ちに待った食事を持ってきたカイに3人の礼が向けられた。

「おっしやあ、食べるぞ……」

「いただきます」

ラチエとルキアはすぐに食べ始めたが、アステイはリメリス教独特の祈りを捧げてからカロリーン煮に手を付けた。

「腹へったー……！ いただきます……」

先程の沈黙とは対称的な長い沈黙がテーブルに落ちた。いや、ただの沈黙ではなく独り言だらけの沈黙だった。

「やつべー……超……うめえ」

「……このシューン……すごくおいしい」

「カロリーン煮……久しぶりだなあ」

「まじ……で……やばいな」

「今日1日……朝ご飯ぶりの飯だ!!」

「胃に……しみるぜ!!」

「腹減った……時って……すげー……美味く……感じんだな」

「……俺……やっぱカロリーン煮大好きだ」

「肉なんて何年ぶり……だろ？」

主にアステイとラチェの感想である。早々にシューンを食べ終わったルキアが目を丸くして2人の独り言を聞いている。

確かに1人暮らしをしていたラチェと、粗食を基本とするリメリス教の僧侶であるアステイの2人はカロリーン煮など食べるのは久しぶりだろう。

「うまかったー」

「ごちそうさまでしたー」

椀から顔を上げて同時に言う2人にルキアは声をかけた。

「じゃあ、お皿厨房に持って行こう」

「うん」

「OK」

6 ・親密度を高めるための会話（後書き）

みんな過去には質問しない

## 7・初めての夜

夜になった。空が完全な闇に覆われる。硬い白金に輝く点が、幾つも天に浮かんでいた。

この時間になって、まだ今日寝るところがないというような旅人はいないだろう。いるとしたら、只の自殺行為だ。

「シユアルウーラ」の2階の部屋では、アステイが、それはそれは気持ちよさそうに寝ていた。ベッドの側には背負ってきた荷物が小さく置かれている。

「はえー」

上から覗き込んでラチエが感心する。

「俺宵つ張りだからぜってー無理だ」

ひとりごちて上のベッドから落下もしくは降りる。

部屋には2段ベッドが2つあり、1つの下段ベッドにはアステイが睡眠をとっていて、それ以外のベッドには誰もおらず、2段ベッドの間の通路にはラチエが着地姿勢でいた。

「やつべ落ち着かねえ！！寝られねえ！！どうしよう！！」

アステイが寝ているというのにお構いなしで、かなり興奮した様子で叫ぶ。

「……あれ？」

”これぜってー怒られる！！”と覚悟をしていたラチエは拍子抜けした。アステイは何事もなかったかのように寝息をたてていたから。

「よかったー」

胸を撫で下ろす。アステイは文句を言わせるとなかなかうるさいと言つことをラチエはこの短い間でよく知らされていた。

「？」

不意に、空気を裂くような音が聞こえてラチエは辺りを見回した。  
「外か？」

部屋の窓を使って外をのぞく。光のない、静かな村があるだけだった。

「何だろう？」

念のために自分のボロ剣をひつつかみ、階段を静かに駆け降りる。明かりに剣をかざして、

「アイント王国行ったら絶対武器新調しよう」

1人決心するのだった。

宿の裏口から出る。さっき見たのは正出入口口だったから、裏にある厩や庭で何かが起こっているのだろう。

バタンツ

「あ……」

「あ……」

同じ言葉を同時に発したラチェとルキア。ルキアは左手に、あのレイピアを持っていた。月明かりの反射で輝くレイピアが、佇むルキアの緑の瞳を照らしていた。

「なにやっつてたんだ？」

「訓練というか鍛錬というか」

曖昧な答えが返ってくる。

「うわ真面目！！でもちゃんと寝ろよ？夜更かしは肌に悪いって母さんが言ってたし」

驚き、そして怒った。

「あ、うん」

勢いに、ルキアが怯む。

「俺も寝られないから一緒に練習しようかな」

「実戦で？」

「ううん。適当に素振りやっつく」

答え、適当な距離を置いて鞘を抜いた。傷だらけの鈍色が、月を映して青白く光る。

「アイントに」

「え？」

「アイントに行ったら、良い武器屋を紹介する」

小さな、けれども確かな声。

「あ、ああ」

ルキアの言葉に狼狽するラチエ。しばらくして、

「ありがとう」

振り向いて、笑った。太陽のように。

「んじゃ始めるよ」

誰に言うともなく言って、刃を閃かせた。

「……」

ルキアは、無言で刃を光らせた。

2人の剣技はまったく違った。輝くレイピアは滑るように流れ、月を滑らかに照らす。時折、その鋭さを闇の中に示した。突きなどの動作もとてもきれいだ。

鈍いロングソードは強く振られている。月光を、裂くように跳ね返している。

2人はそれぞれ異なる虚空の敵に向かって剣を向け続けた。

~~~~~

2時間程が経って2人の息があがってきた。

「俺もう無理ー!!」

喚くと、ロングソードを放り出し、どっかり座り込んだ。隣でもルキアがレイピアを置き、膝を抱える。

夜空に2人の息が白く溶ける。

「……」

「……」

息を整え、そして無言が続いた。

「ルキアは」

「？」

「ルキアはどうしてアイント兵になったんだ？」

「……」

ルキアはラチエを黙って見た。そのまっすぐな眼差しに、ラチエは聞いたことを少しだけ後悔した。けれども、気になることは、知りたくない。ルキア理由は、月並みなことではないだろう。”人々をモンスターの脅威から守りたい”とか、そういう理由ではないだろう。

「わたしの父は、アイント王国の兵の指南者だった」

「うん」

「わたしは、幼いときに母を病で亡くしていた。兵の戦闘訓練の間になると、家事が終わっていても終わっていなくてもついていった。見よう見まねで練習した。」

8歳の誕生日、父から将来何になるかを聞かれたとき、わたしは武術を教えてもらうことを望んだ。1番、わたしには剣が扱いやすかったから剣技を教えてもらった。王国では当時殺人事件が続いていて、自分が強くなればわたし達は長く生きていけると思った。

「ただ、それは叶わなかった」

溜め息をつくように吐き出された言葉を聞き、ラチエは顔を凍りつかせた。

「それは……」

「そう。そういうこと」

静かな表情で語られたのは、残酷な事実。

「ある朝、何かの気配で目を覚ましたわたしは、父が殺されかけているのを目にした。家の中には見たことも無い紋様のついた鎧を着た奴が5人いた。」

『我々は、人間じゃない』

そう言っていた。

いつの間にかそいつ等を倒して、後は記憶がない。もう一度目を覚ましたとき、兵士に父がなくなっただけを知らされた。

自分1人で生きていかなくはならなくなったから、仕事を探した。ちょうどそのとき剣兵を募集していたから応募して、アイント兵になった」

1度言葉を切り、ルキアは言う。

「わたしがアイント兵になったのは、誰のためでもない。只自分が生きていくため。でも、今は違う」

「え……？」

「2度とわたしのような孤児を出さないために、わたしは剣兵を続けている」

静かに、厳かに、確かな意志を持って、彼女は言い切った。

「すごいな。ルキアは」

一息置いて、ラチエが言う。ルキアが彼の顔を見ると、星空を眺める水色の瞳は、きらきらと光っていた。

「よし！ 聞きっぱなしは悪いよな！ ……俺も「いい」

「へ？」

「話したくないって顔に描いてある」

「うそ……？」

ラチエが目を見開いた。

ルキアがさつき見た瞳。きらきら光る真っ直ぐな光片の奥に

儂げな夕染めの空の底のような色があった。遠くなりつつある、けれどもまだ鮮明に思い出せる過去を見ている瞳が。

「……ごめんルキア。俺、まだちゃんと話せないから、またいつか、必ず話すから」

「いい。そんなに謝らなくても。気にしていないし」

しつかりと、言った。

「うん」

そして、2人の間を沈黙が裂く。流れ続ける白金の星は、ラチエとルキアの居るところから遙か彼方に輝いていた。

さあっと冷たい風が2人を巻き込む。過去を語った彼女と語れなかった彼は、今、自分に課せられている役割の重みを感じていた。

7・初めての夜（後書き）

辛かったけれど

過去のことだから

平気だ

辛かった

過去のことだけど

やっぱり無理だ

2人は、深くなり続ける闇の中で座り続けた

8・魔術師は精神年齢が高い

アイント地方全域を、強い光を持つ星々が照らす。夜と昼では、光る星の色や数、光の強さが違うアリニアワールドでは、一際大きい^{レイル}神星と呼ばれる星が昼間だけ光っていた。

なぜ^{レイル}神星が昼だけ光っているのかというと、様々な説があった。人々が活動しているときのエネルギーを借りているのだとか、単にそういう設定なんだとか、昼間の強い光の星々の光を反射しているのだとか。

結局のところ、詳しいことは何もわかっていないのだった。

「アステイ!!! 早く来ーい!!!」

アステイがそんなことを考えていると、階下からラチエの声がした。た。

「わかってるよ!!!」

叫び返し、小さな肩掛け鞆と杖をひつつかんで階段を降りる。ちなみにアステイは魔術師だがローブは着ていない。自らの魔力を常に発動させているが故の事だった。シャツにズボン。動きは俊敏な方だった。

カウンターの前に立つルキアは麻のシャツと長ズボンに小さなリユック。ラチエは、同じような服装の半ズボンで手ぶらだった。

「とりあえず符を買いに行こう」

ルキアの声がかかる。アステイは符が無いと、戦闘時に悪く言えば邪魔になるだけだ。少しだけでも購入するのが望ましかった。だが、

「ああ、符？ おれそれなくても魔術で戦えるよ」

アステイの爆弾発言。

「え？」

ルキアが少し驚いたような顔をした。ラチエはもつとだったが。

「だっておれ、スフィア・レンティスだし」

「いやいやいや!!! それ理由になってないし」

「だからエト（アームのお金の単位）節約できるぞ……！」
満面の笑顔で彼が言う。

「なんで？」

「ああもう！ んじゃ証拠見せたら良いんだろ？」

「見せられるもんなら見せる……！」

キレたアステイにラチエが大声を出す。

「はあ……。ライテスト」

アステイが左手を差し出して呟く。ふわっと香が匂った。

「わっ……！ 光ってる……！」

「速い……」

アステイの左手が、電気のようなものを帯びて光っていた。ルキアが驚いたように、アステイが始動語を呟いた瞬間にはもうその左手の周りで電気が蠢いていたのだ。

「証拠になった？」

「「なりました」」

声を揃えた2人を横目にアステイは手を振って電気を消した。

「次ナメたこと言ったら雷プチ落とすからね」

「心得ておきます」

「じゃあどうする？」

「どうもこうも」

頭を掻きながらラチエが言う。

「薬買いに行くしかないっしょ」

軽く提案した。

「そうだね。回復役いないし」

「うん」

2人の同意を得てラチエが宿の扉を開ける。神星レイルの光が3人の髪を輝かせた。

街を歩き、道で会う人会う人に挨拶をする。

「あっ……！」

ルキアが急に立ち止まった。

「どつしたんだよ？」
ラチエがルキアに尋ねる。
「この長さんに挨拶してない……」
「本当だ……」
真つ青な空が、3人を見下ろす。

~~~~~

「すみません。わたし達は、昨日ここにやってきた旅人です。長様にお会いしたいのですが……」  
「あ、はいはい。わかりました。少々お待ちください」  
門の近くに立っていた護衛人に、ルキアが声をかけた。護衛人が駆けていく先をラチエの薄い水色の瞳が追う。  
「なんて言うのさ？」  
「はあ？」  
ラチエの問いにアステイが素つ頓狂な声を出した。左の肩が大きくあがっている。  
「正直に言つて悪いことがあるのかよ？」  
「あ、いやさ、ルキアはシユアル（ここ）の人には本当のこと言わなかつたじゃん。やつぱまずいかな？ っと思つたわけだ」  
「お偉いさんだから大丈夫なんじゃない？」  
「なにそのテキトー」  
ラチエが明後日の方を向いて呆れた。  
「お待たせいたしました！！ こちらへどうぞ！」  
護衛人が戻つてくる。息を弾ませて直立不動の姿勢をとつた。  
「ありがとうございます」  
礼を言つて中へ進む。質素だが、温かみを感じる建物だった。  
「失礼いたします」  
「失礼しまーす」  
「失礼します」

それぞれ言って、長の部屋に入る。

3人の前にあつた大きな机の向こうに、壮年の男が座っていた。

「こんにちは。通過点シユアルへ、よくぞいらつしゃいました。こちらにお掛け下さい」

言われるままに、3人は椅子に座つた。ラチエがきよるきよるするのを、アステイが膝を叩いて諫める。

「こんにちは。わたしはアイント兵のルケイアーク・シアルリーフです」

「おれは、リメリス教魔術師のアーシユーター・シーファイリーです」

「俺は……ラルクの剣術指南者のラーチエンド・ファーリエンです」  
3人続けて自己紹介する。ラチエは少し迷つたが、職業もつけた。そこまで指南に自信はないのだが、ルキアとアステイがつけていたので流れを読んだのだ。

「私はシユアルの長のホイシークトナ・シユアルウーラです。この度は、どのようなご用件で？」

「はい。世界の危機を救うために」

なんの迷いもなくラチエが言い切つた。

「お前は馬鹿か？」

「え？ だつてそうだろ？」

「こうなんかさ、もつと順序というべきものがあるだろ？ ほら！

！ 長さんだつて啞然としてらつしゃるじゃんか！！」

「それはアステイの声がでかいからじゃねーの？」

「明らかちげーよ！」

「あの、お二方……？」

「ラチエ、アステイ？」

2人が長とルキアの方に顔を向けると2人ともが困つたような顔をしていた。

「すみません！！！」

不覚にも声がそろつてしまい、またお互いの顔を見合わせる。

「これはアステイが1番わかっているからアステイに説明してもらっても良い？」

「へ！？ ああ、うん。良いよ」

「じゃあ、お願い」

背筋を伸ばして行儀よく座る。

「長様、ローネにある大聖堂リメリスはご存じかと思えます。おれは……」

静かな部屋の中で、低いアステイの声だけが響いていた。

~~~~~

「それは、本当のことですか？」

長の驚きを隠せない様子に、ラチエが身じろぎする。1回聞いた話をもう1度聞くのは耐え難い退屈さだ。昨日もそこまできちんと寝たわけではない。座り心地の良い椅子と、流れる静かな空気にラチエの眠気は増すばかりだった。

「はい。おれがスフィア・レンティスであることと、ルキアがアイントの特級剣兵であること、ラチエがレーテットであることが証拠です。証拠にするには少し頼りないものですが……」

「いやいや、あまりに大きい話だったので、驚いただけです。それで、どうなされるおつもりですか？」

「あー、っと、ルキア、チエンジ」

「わかった。このシユアルに住む方々に、聞き込みをするつもりです。何かご存じのことはないか」

「それなら、外れに住む、ヒシユカトヤナ・トクウエーザ、ヒユナと言う女性に尋ねてみてはどうでしょうか？ 彼女はラルサと人間のハーフで、魔術や伝承などにも精通しております。少しはお力になれるでしょう」

「わかりました。ありがとうございます」

「いえ。あなた方のような若き人にはこの旅は困難を極めるでしょ

うが、どうかお心を強くお持ちになって、事を成してください」

「はい。ご協力感謝いたします」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。あなたに神の御加護がありますように」

3人はそれぞれ感謝を表す動作をして部屋を出た。

「さっそく、その人の所へ行くか？」

「待て」

ラチエが興奮気味に尋ねると、アステイがそれを止めた。アステイの声になんかを感じ、ラチエはこれ以上そのことについて言うことが出来なかった。

屋敷の外に出て、アステイが大きく息を吸った。

「で、どうする？」

ラチエがまた尋ねる。

「とりあえず薬屋かな？」

「うん。もしもの時のために買っておかないと」

「OK！ じゃ、行くか！！」

勝手にさっさと行ってしまつたラチエと、慌ててそれを追うルキア。

2人が腰に下げる剣の装飾が、光を受ける。

「うわ、元気なやつ」

1人呟く年寄りアステイがいた。

8・魔術師は精神年齢が高い(後書き)

「あー、良い天気だなー」

3人の中では1番年下なアステイ

9・聞き込みと視線

ヒシユカトヤナ・トクウエーザの家は、小さく、それでいてなぜか異様な存在感を放っていた。家自体と言うよりも、周りの雰囲気こそがそう感じさせていた。町の外れにあるというだけでは得ることができない、人気のなさと静けさをその家は纏っていた。

ガチャ

「えっ？」

「いらつしゃい、ラチエ、ルキア、アステイ」

長の家からここに直行したラチエ達3人がドアの前に到達する少し前に、ドアが開いた。3人が例外なく驚いたような顔をする。

「ま、外にいるのもなんだから入って」

「は、はあ……」

不思議そうな顔を続かせて3人が続く。アステイが1度左手を開いて炎を揺らめかせた。

「ふーん。そういうことか」

「何かあった？」小さく言っただつてもりだったが、ルキアには聞こえていたようだ。アステイはぶんぶんと首を横に振る。

「こちらに座ってちょうだい」

指し示された長椅子に座り、ルキアはヒユナの観察を始める。茶色い艶のある髪は後ろの低い位置で無造作に括られ、長身の体にズボン姿がよく似合っている。赤みがかった茶色の瞳の光が快活そうに煌めいていた。若そうにも見えるが纏う雰囲気のせいで年齢が想像できない。武器は持っていないだろう。人間とラルサのハーフなら、魔力を持っているのだろうか。魔力で攻撃されれば防御はできないがアステイがどうにかしてくれるだろう。

そこまで考えて、ルキアは緊張を解いた。そして無条件に仲間を

信頼している自分に気づき心の中で微苦笑をもらす。

「すごい、なんで？ って顔してるわね。私は元スフィア・レンテイス。だから前もってわかるのよ」

「やっぱり。聞いたことあるんです、先輩に。それにこの家、かなりの魔力が感じられます」

「うん。流石現役のスフィア・レンテイスさんね。あなたのことは、噂で聞いたわ」

「あ、お、恐れ入ります……」

恥ずかしそうに顔を赤らめるアステイの横でラチエが咳払いをした。

「あ、ごめんね。君達は何が知りたい？」

「じゃあ、俺が」

ラチエが真剣な顔で問う。

「何でも良いわよ。私が知っていることなら」

「カミルがどういところなのか。俺達に行けるところなのか。俺達の仲間になるはずの人はどこにいるのか」

ラチエは疑問の連撃をヒユナに浴びせた。

「アステイから聞いたと思うけど、カミルのことは殆どわかっていないわ。だからこれは私の仮説。心のどこかに留めておくだけで良いわ」

「はい」

「あのカミルと言う世界は私達もラルサも人間もエルフも、誰一人として使えない力が生み出したもの。あの世界ではこちらの3つの世界の常識は全く通用しない。私は、このアリニアワールドに渦巻く全ての不満がカミルを作り出したと考えているわ」

「不満、ですか……」

「あくまでも仮説よ」

溜め息をつくように吐き出したラチエの声を、ヒユナが硬く諭した。

「私は、魂1つになってカミルに行ったことがあるわ。恐らく私は、始めてカミルの存在を感知した者よ。大聖堂には何も知らせずに、

鎮魂の禁書」の術を応用して勝手に使ったのよ」

「そんな……っ。あれは、場合によっては術を唱えた者の命を脅かす禁書じゃ……」

アステイの頭が弾かれたように上がった。

「そうよ。若かった私は少しだけはカミルに居ることができたけれど、すぐに戻された。魔力を感知した他のスファイア・レンティスが引き戻したのよ。そのときから、私は高位の魔術を使うことが出来なくなってしまった。

カミルは、混沌としたところだったわ。霧が深く、暗いところ。あのまま引き戻されていなかったら、うようよいるモンスター達に殺されていたでしょうね……」

「不満、かどうかはわかりませんが、人智を超えた何か働いているのは確かですね」

ルキアが静かな声で意見を述べる。

「ええ。あとあなた達が行けるかどうか。それは問題ないはずよ。アリニア、ワールドのどこかにあると言われる天樹から自動的に転送されるはずだわ。

そして、残りの仲間のことね。ラルサの1人は、私も噂に聞いたことのある少女よ。アステイは、サファイア青宝石族よね？」

「はい」

アステイが軽く肯定する。ラチエが疑問の声を上げた。

「サファイア？」

「ラルサの種族名よ。この際だから説明しておくわ。ラルサが生まれつき、多かれ少なかれ魔力を持っているのは知っているわね？」
ラチエとルキアが頷くのを確認してヒユナが続けた。

「その魔力に種類、と言うより属性ね。それがあってその属性ごとに種族が別れているのよ。アステイの所属するのはサファイア青宝石族。水や氷の属性を持つ種族よ」

「ヒユナさん、1つ良いですか？」

ラチエがヒユナの言葉を遮った。

「何？」

「アステイはじゃあ水の属性魔法しか使えないんですか？ 今朝も雷っぱいの使ってたけれど」

「良い質問ね、ラチエ。そこが、アステイがスフィア・レンティスになることができる理由よ。アステイは特別に魔力が強いから、全ての属性魔法を使うことができるの。」

後のラルサの1人は月長石族の2番目の魔術師。シルヴィエイ・ティルミーズ。シルミーと言う名の少女だわ」

「シルミー……」

ルキアはその名を呟き、まだ会ったこともない魔術師の少女に思いを馳せた。

「シルミーもアステイと同じように全魔法を使うことができるわ。」

ローネの月長石族の領地で会えるとは思うけどあまりよくわからないわ。ごめんなさい。」

後のエルフの2人は私にはよくわからないわね。あまりい
え、かなりお役にたてなかったけれど、これで良いかしら」

「いいえ、十分です。助かりました。貴重な情報、ありがとうございます
いました」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

ルキアが礼を言い、ラチエとアステイがそれに続いた。

「じゃあ、大変だろうけれど、頑張つて。あ！」

「？」

「へ？」

「え？」

突然大声を出したヒユナにルキア達3人は動作を止める。

「アステイ、いらつしゃい」

「え、あ、はい」

突然呼ばれたアステイは首を捻った。

「なんですか？」

「はい、これ」

手渡されたのは小さなダイヤモンド。

「あなたは……春雷^{ダイヤモンド}石族なんですか？ 石を貰ったら、あなたは魔法を使えなくなってしまうよ」

「良いのよ」

アステイの手のひらに乗ったダイヤモンドを見てヒユナが言った。

「今のままで良いかもしれないけれど、これがあつたら魔力が少しでも増えるかもしれないからね。持って行って良いわよ」

「……ありがとうございます。本当に……ありがとうございます」
同じ言葉しかでなかった。同じラルサであるアステイには石の大事さが痛いほどわかる。少しどころか、大いに助かる。

ヒユナが、アステイの肩に手を置いた。

「さあ、行きなさい。ラルサに与えられた魔力を、世界を救うために存分に振るいなさい」

アステイの姿が、ラチエには小さな子供のように見えた。

「はい」

アステイが、ラチエとルキアの方に歩いて、ドア脇に立った。

「ありがとうございます。失礼致します」

「いつてらっしゃい」

「……いつてきます」「」

~~~~~

ヒユナの家を出た3人は、薬屋に向かっていた。結局ごたごたして遅くなってしまったなあとアステイは思う。

「……」

「ルキア、どうしたんだ？」

先程からある一定の方向に何度も何度も振り返っているルキアを訝しんでラチエが尋ねた。

「……なんか……見られてる……ような」



9 聞き込みと視線（後書き）

でも 確かに 小さな影が見えたんだ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3163/>

---

Arinia World -アリニア ワールド-

2011年3月23日16時40分発行